矢野龍渓の文学表現をめぐって

松木　博

一、

近代文学の成立期に、矢野文雄筆名龍渓の名前を欠かすことは出来ない。歴史小説にして政治小説でもあった『斎武名士　経国美談』（明治十六、七年）は広く読まれた。版を重ねることおびただしいものがあるが、大正四年に出た改訂縮刷版に次の様な記述がある。

教科書以外の模範典籍

先に文部省に於て師範学校、中学校、高等女学校生徒をして読ましむに適当なりと認むる書籍につき、各地方長官に照会して当該各校長の意見を徴したるに全国多数の共通指摘中に加はりし本書が如何に多くの趣味あり且つ有益なるか其の一班を知らるべし

現在で言うならば、文部省の指定図書としての位置を占めるものであったことが理解できるだろう。

しかしながら、現代に於いて矢野龍渓の作品が読まれているかと言えば、文体の難しさもあって、『経国美談』『報知異聞　浮城物語』（明治二十三年）といった代表作さえも受容されているとは言い難い。

本稿で考えてみたいのは、矢野龍渓の文学表現の実質である。なぜ当時多くの読者を得ることが出来たのか。近年既に亀井秀雄氏の『経国美談』の分析[注①]によって、龍渓の制作の方法が鮮明になっているが、文学表現としてどのように優れていたのかについて、明らかにしてみたい。

二、

近代文学の表現が、翻訳文学によって大きく変化したことは疑いのないところである。当時の文学者が、創作と翻訳を同時に発表していたこともあるが、一番の要因は欧米の文学概念が、翻訳作品によって移入されたことであろう。『欧州奇事　花柳春話』（明治十一年）の訳者丹羽純一郎は、『通俗　花柳春話』の中で次の様に述べている。

摩康隷曰く史に三種あり一に法律史と曰ひ二に戦争史と曰ひ三に風俗史と曰ふ蓋し法律史ハ法律制度の沿革を明にし戦争史ハ治乱興敗の痕蹟を記し風俗史ハ風俗人情の変更を詳にす若し此一を欠ば便ち史の全体を知こと能ハずと

叙はこの様に書き出されている。以下丹羽はマコーレイの言葉に従って、この三種を総合した書物が存在しないことを述べ、この翻訳を

日本に於ける英国の風俗史を知る為の書物と位置づけるのである。

此書ハ英人李頓氏の著にして英国近世の風俗人情を写して剰す所なく政事家の内密、党派の密情、親子の親、夫婦の愛、貴賤の別、貧富の差其事ハ皆人の視て而して未だ見ざる所を載せ人の知て而して未だ識ざる所を記す（中略）余嘗て英国より還の後比書を訳して以て世に之を公にし以て英史を読む人をして其近世の風俗人情を知しめ且英史の本体を完備ならしめんことを望め り蓋し正史ハ大方の識者業に已に之を翻訳する所多ければなり 注①（波線引用者）

ここで丹羽が意図した正史の補助としての小説という考え方は、当時の知識人に共通のものであったと思われる。後に坪内逍遥は、「小説神髄」上巻の「小説の裨益」の項で、スコット、ミラー、サッカレーを引用しながら「正史の補遺となる事」を述べているのである。しかし、この様な自己限定は、「花柳春話」の翻訳が持っていた可能性を奪うものであったと言える。成島柳北の「欧洲奇事花柳春話題言」からも、明らかに後退した認識である。現代のいわゆる比較文化論へ、或いは政治小説へという可能性を、丹羽純一郎は自ら放棄した。この後の彼の文学活動が、明治初年の啓蒙活動に類似するのはこの理由による。

丹羽が翻訳文学者としての意識を喪失していったのに対して、矢野龍渓は翻訳文学に大きな貢献を為した。「経国美談」（前篇明治十六年三月、後篇十七年二月）がそれである。自序に拠れば、この作品の成立は次の様な経過を辿っている。

（前略）手ニ任セテ、枕上ノ書ヲ取リ、之ヲ読む。巻中会マ希臘、斎武勃興ノ事迹ヲ記ス。其事奇異、粉装ヲ加ヘズシテ、人ヲ悦バシムルニ足ル。因テ之ヲ訳述センコトヲ思フ。（中略）史家が斎武ノ事ヲ記スルヤ、多クハ其ノ大体ニ止テ、当時ノ顛末ヲ詳記スル者少ク、人ヲシテ糢糊雲烟ヲ隔ツルノ想ヒアラシム。是ニ於テカ始メテ其ノ欠漏ヲ補述シ、戯レニ小説体ヲ学バント欲スルノ念ヲ生ジたり。注②

歴史書の翻訳に空想で補なって行くという形であって、その意味では「経国美談」も翻訳の発展形と見ることが出来る。龍渓の立場は史実を極限まで尊重しつつ、尊重するが故に小説性を加えて作品化することが要求されていたのである。それはまた、史実をも取捨選択することを意味していた。「凡例」には、

一、此書ハ希臘ノ正史ニ著明ナル実事ヲ、諸書ヨリ纂訳シテ組立テタルモノニテ、其ノ大体骨子ハ全ク正史ナリ。（以下略）
一、書中ノ地理ハ成ルベク真の地理ニ拠レリ。（以下略）
一、書中ノ重モナル人物ノ姓名ハ、無論総テ正史に拠レリ。（以下略）

という記述が頻出するが、それとともに、

（前略）唯残忍ニ過グルガ如き箇条ハ、一、二ノ実事ヲ没シタルコトナキニアラズ。
（前略）又其他正史ニ見エザル姓名ハ、其人物ノ善悪ニ従ヒ、善人ノ姓名ハ、希臘史中ノ他ノ時代ノ善人ノ姓名ヲ仮用シ、悪人ノ姓名も亦タ、他ノ時代ノ悪人ノ姓名ヲ仮用セリ。

という注記も存在していた。龍渓の内部に於ける史実と小説性との葛藤が、次の凡例に端的に表われている。

一、書中諸名士が宴席ニ奸党ヲ襲フ事ハ、残酷ニ過グルガ如キ観アルヲ以テ、一回ハ之ヲ更変セント欲シタレ𪜈、此事ハ正史ノ大体ニ違フヲ恐レ、其儘ニ之ヲ組立テタリ。之レ此書ガ正史ヲ骨子ト

為スニ因ル。然レトモ殺戮ノ実事ヲ更メテ、尚ホ之ヲ捕縛ニ止メタリ。

史書と史書を突き合せてそこから一つの史実を見出しながら、様々な操作を加えていたことがわかる。その時点で、龍渓は当然文脈(Cultural Contexts)間の二項選択的な状況にも直面していたと思われる。歴史的かつ文学的リアリティの追求はその状況を切り抜けたところにあった。とは言っても、龍渓の小説観が同時代の作家に比べて格段に進歩していたわけではない。もし正史に拠らず自らの小説性を存分に発揮していたならば、戸田欽堂の「民権演義情海波瀾」の域を越えることは出来なかったと思われる。前篇の第一回で、少年時代のペロピダス、イパミノンダス、メルローの様子が描かれる。放課後の教師の史談に対して、三人三様の反応を示すのだが、例えばペロピダスは次の様に描かれてしまうのである。

此ノ時一群ノ中ニテ、其ノ齢最モ幼ク、可愛キ容顔ノ中ニ、凛然タル気象アラハレタル、一人ノ童子先ヅ発言シケルハ、「諸兄ハ二人ノ中、何レヲ好ムヤ。余ハ最モスラスブリコスニ、為リ度ク思フナリ。若シ我々成人ノ後ニ至リ、我ガ国ニ三十奸党ノ如キ者アラバ、余ハ身ヲ棄テヽ、スラスブリコスノ如ク人民ヲ済フベシ。諸兄モ、然ハ思ハズヤ。」ト、云ヒケルニ、子供心ニモ、義ニ勇ムノ性質ト見エ、

史書に語られていない箇所では、登場人物が、賦与された性質の化身になってしまっている。それは「情海波瀾」の魁屋阿権、和国屋民次の造型と変わるところがない。龍渓は、正史に可能な限り則ることによって、かろうじて前近代的な小説性[注3]を克服していたのである。平岡敏夫氏はそれを「『恋愛』を追いつめる思想[注4]」としてとらえ、「経国美談」に於けるその思想の達成の有様を次の様に評価している。

『経国美談では、のちにふれる『佳人之奇遇』と同様、政治と恋愛を一致させ、しかも、恋愛の結実を示さぬことで、人情本的恋愛を超えようとしている。(中略)だが、こういうことがある。ペロピダス・イパミノンダスはのちに亡国メッセナの名門の少女テイノ・ゴウキスの「薄命ヲ憐テ」(後篇第十一回)結婚するに至るが、これはむろん恋愛の実現というものではない。しかし、これをつけ加えたという点に、作者の「人情」把握の不徹底性を見ることができるかもしれない。政治の実現という正史・実事のコースに、ひきずられて形をととのえようとしたのだろうか。このことが「剛腸」「英断」といった、作者の強いモチーフに支えられていないことは言えるが、結婚というこのふやけた小説性は、政治の達成ということに起因するとすれば、そのことは逆に、せっかくの正史・実事による政治の達成そのものを稀薄化するかも知れぬのである。

龍渓の小説性は常にそのような形で史実との間に緊張関係を持っていた。二者は作品内のあらゆる場面で互いに損ない合う形で共存していたと言える。この違和は、違和としてあることで「経国美談」を独自の作品としているのである。作者龍渓の内部には、これまで論じてきた、柳北や丹羽純一郎の内部に見られた原作(及び原作の文脈)との葛藤と同じものが存在していたと思われる。そしてその葛藤は作品を破綻に追い込みながら、受容する読者層を引きつけるという作用を持っていた。他の政治小説、たとえば末広鉄腸の「雪中梅」などでは、政治と恋愛との間に違和よりも調和があった。しかしその調和からは、新たな表現の可能性が開かれはしなかったのである。

では、矢野龍渓が「経国美談」を書き得たのはいかなる表現意識によるものであろうか。その疑問に手がかりを与えるのが、「経国美談」と同じ年の十一月に出版された「訳書読法」である。この書物は、地方の読書を目的とする結社の人々に翻訳書の読み方を指導したもので

ある。数多く出版されている翻訳書の中から、どの本を選びどの様な順序で読み進めるべきかを、自らの読書体験を交えながら説いているのだが、その中に注目すべき指摘がある。それは、「類別」の概念の強調である。第三「訳書ノ類別及ヒ先後の順序」には次の様に書かれている。

余カ適当ト思考スル訳書読方ノ順序ヲ陳ヘント欲スルニ当テハ、先ツ事物ニ類別アルヲ略説セサル可ラス。（類別ノ事ハ不急ノ弁ニ以タレヒ、西書中ニハ類別ヲ為スコト極テ密ナレハ序ニ之ヲ略説ス。訳書ヲ読ム者モ亦タ之ヲ知リ置クヲ必要トス。）類別トハ則チ類ヲ以テ事物ヲ区別スルノ法ニテ、東洋ニモ古ヨリ類別法ナキニアラヲトモ、之ヲ印度ヨリ以西欧米諸国ニ行ハル、類別法ニ比較スルヒハ、甚タ疎漏ニシテ幾ント類別ナシト云フモ可ナリ。[注5]

翻訳書による学習を志した初学の人々に、龍渓はまず第一に「類別」の概念を修得することを求めた。東洋の類別法は「疎漏」として退けている。ここで問題とされているのは、広く言えば西洋と東洋の文化的背景であり、文脈（Cultural context）であると考えられる。この概念が理解できない限り、翻訳書から得る知識も自らのものにならないのである。龍渓は「類別」の効用について更に次の様に述べる。

何事ニ因ラス万般ノ物、万般ノ事、之ヲ類別スルヿ皆極テ精密ニシテ、卒然ト之ヲ見レハ煩ヲ増スニ似タレヒ、深ク之ヲ味フニ随テ、事物ヲ分明ナラシムルハ非常ノ利益アル者ナリ。然ルニ東洋ニテハ何事モ混合シテ之ヲ類別スルヿ甚タ希ナリ。

事物の本質に迫るためには厳密な思考が要求される。類別して初めて理解したと龍渓は考えるのである。「経国美談」の「凡例」が十一箇所に分けられているのは偶然ではない。最後の、文体について述べた一箇条を除けば、全ては正史とそれに加えられた潤色について述べているものである。そしてその趣旨は「自序」に於いて、既に十分語られている。しかし龍渓にとっては、この凡例こそ不可欠なものであったに違いない。東洋的な「稗史」の発想からは、「経国美談」は決して生まれることはなかったであろう。東洋の類別概念を彼は次の様に批判している。

支那、日本ニテ古来「仁、義、礼、智、信」ノ五者ヲ五常ト称フルカ如キモ、其類別ハ甚タ穏ナラサルカ如ク覚ユ。何トナレハ是ノ五者ハ五箇ノ同類ノ者ヲ集メタルニモアラス。又五箇ノ異類ノ者ヲ集メタルニモアラス。其ノ集メ方甚タ不当ナレハナリ。抑モ、仁、義、礼、信ノ四者ハ是レ人類交際上ノ規則トモ云フヘキ者ニシテ、之ヲ道ノ類ニ属スル者トス。然ルニ其ノ智ナル一物ハ則チ世人カ事ヲ処スルノ宜キヲ得タルヲ指ス者ニテ、之レ則チ能力ノ類ニ属スル者ナリ。然ルニ人類ノ常道ヲ表スル四徳（同類）ノ中ニ、心ノ働キナル智力（異類）ノ一物ヲ加ヘタルハ、古人カ其類ヲ誤リシ者カト思ハル。是レ東洋ノ類別法ノ疎ナル一証ナリ。又其ノ他、精密ニ思考スレハ東洋ノ類別ハ概子皆ナ粗漏不当ナル者多シ。（中略）東洋ノ事物ノ名称カ人ヲシテ類別ニ苦シマシムルハ誠ニ遺憾ト云フヘシ。而テ其ノ類別ノ粗ナルハ、是レ皆ナ心力ノ進歩セサルノ徴候ナリ。（傍点著者）

私はここに表現された様な西洋的類別概念を、矢野龍渓の重要な表現意識と考える。もちろん龍渓はそれを翻訳書によって学んだのであるが、その概念を自らのものとすることができたのは、彼の資質による。西洋の学問を学びながら結局東洋的発想から脱することが出来なかった人は多くいたのである。西洋の厳密な類別概念で歴史を学び、日本の社会情勢を観察することによって、初めて「経国美談」の素材と手法とが発見できたのであろう。その概念は後篇の「文体論」に於

いて、漢文体・和文体・欧文直訳体・俗語俚言体の四種の文体を分析し、その四種を兼ね合わせた文体を用いるという点にも見ることができる。そしてまた龍渓は、「経国美談」が達成した事や、小説のあり方についても、漠然とした考え方で満足してはいなかった。「自序」（前篇）の最後の段落で彼は次の様に述べている。

世人動モスレバ輙チ曰フ、稗史小説モ亦タ世道ニ補ヒアリト。蓋シ過言ノミ。若シ夫レ真理正道ヲ説ク者、世間自ラ其書アリ。何ゾ稗史小説ヲ仮ルヲ用ヰン。唯身自ラ遭ヒ易カラザルノ別天地ヲ作為シ、巻ヲ開クノ人ヲシテ苦楽ノ夢境ニ遊バシムルモノ是レ則チ、稗史小説ノ本色ノミ。故ニ稗史小説ノ世ニ於ケルハ、音楽画図ノ諸美術ト一般、尋常遊戯ノ具ニ過ギザルノミ。是書ヲ読ム者亦タ之ニ遊戯具ヲモテ、視ル可キナリ。唯其大体骨子ハ則チ正史実蹟ナルヲ記センノミ。

「世道ニ補ヒアリ」とは勧善懲悪の思想を指していると思われるが、龍渓はこれを明確に否定している。彼の小説観は一言で言えば、「小説」イコール「遊戯具」というものであった。[注6]「尋常遊戯ノ具ニ過ギザルノミ」という断定には、逆にこの作品に対する自信も感じられる。

三、

明治二十三年一月十六日から三月十九日まで、矢野龍渓は自ら主宰する「郵便報知新聞」に小説「報知異聞」を発表した。この作品は同年四月に「報知異聞浮城物語」と改題して出版され、大きな反響を呼んだ。その背景には二十二年十二月の「女学雑誌」雑録から端を発した文学極衰論争があった。

「報知異聞浮城物語」（以下「浮城物語」と記す）の特色は、上井清太郎という青年の日記を新聞で公開するという仮構の下に書かれていることである。「緒言」にはその手記が報知社の社員の手に渡った経過が述べられ、「其跡或は疑ふへきあらは読者一部の小説として之を恕して可なり、原書は日記の類なり。総て本人の自叙体を用ゆ、本社之を修飾する亦た其旧に依る、書中『余』と称するは上井清太郎自家を指すものと知るべし」[注7]と書かれていた。物語は上井が作良・立花という人物と知り合うことに始まり、南アフリカに独立国を建設するために出国しジャワの内乱に参加するという様に展開する。こうした世界を視野に置いた冒険小説が飽くまで事実を装って書き進められている。越智治雄氏はこの作品を、少数の英雄達によって国民が導かれるという主題に於いて、「経国美談」に連なるものと位置づけている。[注8]妥当な見解と思われるが、「浮城物語」の問題点は、現実との距離の取り方にあると私は考えている。荒唐無稽でもなく、卑近な日常でもない境地を龍渓は選択している。つまりこの作品に於いても、事実性と小説性とは緊張関係を持つ様に設定されているのである。とは言っても結果的には小説性の圧倒的な勝利に終わっているので、「経国美談」の達成とは異なるものだが、緊張関係の上に作品を成立させようとする意図は明らかである。そしてそれは龍渓の類別概念によるものであったと思われる。「経国美談」に於いても、当時の社会情勢を分析してそれに適応する素材と方法を用いたことは既に述べたが、それを可能にしたのは龍渓の穫得し得た類別概念である。「経国美談」では凡例の十一箇条と文体論とにその類別概念が見られた。「浮城物語」に於いても、その概念は同様に作品を支配していると言ってよい。その有様は、制作過程を述べた文章「浮城物語立案の始末」に見ることが出来る。この文章は、作品出版の後の二十三年六月から七月にかけて発表されたものだが、龍渓はこの作品の方法を選択した過程をそこで語っている。

今、生じ来る可き一疑問は、事柄の壮快なると優柔なるとを問はず、之を写すには須らく極微極密なるべきや、否やと云ふに在り、

而て余は我国今日の文学界は方に精粗繁簡の中を得たるもの最も適当の時代なりと考えたり、西洋の文は極めて密、東洋の文は極めて粗、之れ争ひ難き東西の相違とす、而て我が国人は長く此の粗文字に慣れて未だ西洋の密文字に慣れず、今や漸く将さに粗より密に入らんとするの時に在り、若し時好に適するの文字を作らんと欲せば亦た粗密の中間に立たざるを得ざるの勢あり、西洋に於ける文字の進歩も其跡を推す時は亦た粗より密に入れり、文字地を払ひし夫の中世の暗黒時代より卒然一躍して今日の密境に進みしには非ず。ドンキホテー、ジルブラスの如きは千六百年内外に大喝釆を博せし者なれども今日の十九世紀に現出せば或は文体の粗なるを憾む者あらん、亦今日の微密文字をして卒然と十三四世紀前に出でしめば亦た或は其の細瑣に過るに倦む者あらん。然る所以のものは他なし、人心の進歩は積累の致す所なればなり、我国にて久く西書に陳藉する者こそ稍や西洋微文字の味を嘗め始めたりとも多数なる世人は決して然るにあらず。此時に当て卒然と西書に劣らざる微密文字を提出して読者の厭倦を来たさゞる者は幾希、之れ浮城物語の事柄の濶大なるに相当して精粗中間の文字を用いるに利ありと決せし所以なり。[注9]

ここで龍渓の言う「精粗繁簡」が今の日本にふさわしいとする認識こそ、「浮城物語」の性格を決定するものであった。越智氏は龍渓の文学観の特質を、「実事とのバランスの感覚で文学が捉えられている」こととしている。[注10] このバランスの感覚を与えているのが彼の内部の類別概念である。他の人々が一体のものと認識している事物を、いくつかの相に分類してとらえることにこそ、龍渓の特質があった。他者からは過剰の分類と見えるものも、彼にとっては不可欠の識別であったので、弁別できる極限まで追いつめて物事をとらえるという行為を積み重ねていったのである。その集積が「経国美談」であり、「浮城物語」なのであった。この二作品が与える、同時代の作品と全く隔絶した印象は、龍渓と他の作家との類別の概念即ち表現意識の精粗の差によるものと考えられる。

しかし、その様な作家龍渓の内部を理解し得た人は少なかった。徳富蘇峰は「浮城物語」を次の様に評している。[注11]

報知新聞の如きは、亦焉ぞ其変を啓きたるものに非ざるなきを知らんや、或看二翡翠一蘭苕上、未レ掣二鯨魚碧海中一、君それ明治文学海の鯨魚を掣せんとするもの乎、（中略）其変転宛も走馬灯の如く、人をして奇と呼び、快と叫ばしむ、而して其記する所の者は、粗なるか如くにして、実は精、所謂十九世紀の実学を架空文字の中に寓したる者にして、之を評して、一種第十九世紀の水滸伝と云ふ、亦不可なかる可し、（後略）

蘇峰は作品内の精粗の仕組みを読み取っているが、その反面「鯨魚」という比喩や「第十九世紀の水滸伝」という評価をしており、近世小説的価値観から逃れ得てはいない。[注12] 石橋忍月は「国民之友」で論じているが、蘇峰と同じく、この作品を宮本武蔵や武勇伝や神稲水滸伝と同列に扱っており、「全篇殆んど七十回、読み去ッて果して何の得る所ぞ、吾人は只烟が時と処とを変へて浮揚するを望見するの外、何等の哀感をも生ぜず」と言って、「之を要するに、本篇は経国美談と比較せば格別の拙作なり」と断定している。また内田魯庵は「『浮城物語』を読む」（二十三年五月八日、十六日、二十三日「国民新聞」）で「余は断じて曰ふ、『浮城物語』は文学上半銭を価するものにあらず」と決めつけている。そうした中で、「浮城物語」を論じつつ作家龍渓の内部構造を分析してみせたのが森鷗外であった。その文章「報知異聞に題す」[注13]は、次の様な類別から始まっている。

報知異聞出でたり。之を評するものゝ曰く。武談に似たりと。武談とは彼欧洲「ロマンチック」の胚胎せし所にして、マンチヤの貴

公子が愛玩して心を喪ふに至りしものか。又曰くジユウル、エルヌが稗史に似たりと。ジユウル、エルヌが稗史とは彼自然学の事を藉りて結構をなし流俗の眼を驚かしたるものか。又曰く。「ロビンソン、クルソオ」に似たりと。「ロビンソン、クルソオ」とは彼弧島に漂泊したる蘇格蘭の一水夫が伝を潤色して千秋の名を成したるデフオオが文字なるか。

武談の陋は固より言を竢たず。「ヒダルゴ」宅裡の一炬、これを焚くも憾なし。エルヌが幾巻の書、様に依りて胡盧を画く、又何の趣をか成さむ。デフオオが「アアル、シイ」は奇なりと雖、之に継ぎて出でたる蕪雑なる「ロビンソナアデ」幾十百種に至りては、僅かに以て童孩の戯具となすべきのみ。

龍渓居士は狂せるに非ず。余その既に高閣に束ねられたる武談を学ぶことなきを知る。龍渓居士は窮せるに非ず。何を苦みてか又エルヌを学びて多作の誹を受けむとせむ。龍渓居士は老たるに非ず。恐くは又児童のために書を著はすがごとき閑暇なからむ。

余は則謂へらく。龍渓居士は一代の豪なり。胸間鬱勃の気凝りて此一篇の文を成ししなり。

鷗外はこの様にして「浮城物語」の独自性を述べている。その際の類別の方法は、他の評論家には見られなかったものである。その類別概念は、「第十九世紀の水滸伝」や「神稲水滸伝」と混同する東洋的な概念ではなく、龍渓が「訳書読法」で述べた欧米諸国の概念であると言えるだろう。さらに鷗外は論を進める。龍渓の表現意識に即した作家論的色彩が強くなって来る。

武談と云ひエルヌが稗史と云ひ「ロビンソナアデ」と云ふ皆一種の冒険事蹟を伝へしものなり。故に報知異聞は之に形似したるのみ。今の欧洲の文学者は、大抵皆ジユウル、エルヌを卑めり。其之を卑む所以は、蓋しエルヌが其小説の主人公を駆りて、或は蒼天の上に上らしめ、或は浪海の下に下らしむるに、多く相似たる手段を以てし、その篇を成すに及びて之を見れば、渾て是れ自然学の演義に他ならざればならむ。又彼が大を喜ぶ心は精を喜ぶ心に伴はざればならむ。

龍渓居士は嘗て経国美談を著はして一時を傾倒しぬ。若し居士をしてゲオルグ、エエルス一流の人物ならしめむか。其歴史小説の幾十種は相継いで出でしならむ。而るに居士は此に出でざりき。其故何ぞや。居士が精を喜ぶ心は之をして然らしめしのみ。徳富蘇峰氏も亦此書の題言を作りて作者の平生を叙して曰く。君は他事に謹慎なるが如く文事にも極めて謹慎なる人なりと。亦以て徴すべし。余は知る縦然報知異聞はその世に行はるゝこと経国美談の上に出でむも、居士は彼エルヌ輩が為す所に倣ひて、幾十種の科学的小説、若くは外国小説を製作するものにあらざるべきを。

キクトル、ヨゼツフ、シエツフエルは文才横逸なりしが、「エツカルド」を作りて後筆を複稗に絶ち、「フヂゲオ」を作りて後筆を単稗に絶ちぬ。我龍渓居士の報知異聞に於けるも、其れまた是に似たらむか。

鷗外の発言は、作家矢野龍渓にとってかなり厳しいものであった。そして筆を絶つであろうという部分は予言として、現実になってしまった。私はこれを、鷗外が龍渓の文学者としての内面を理解していたからだと考える。「経国美談」はあれだけ受容されながら、龍渓は続けて作品を発表しなかった。龍渓にとって見れば、同様の作品を書く必要は認められなかったのであろう。素材と方法との間に緊張関係が成立する時に限って、龍渓の創作活動は為されるのである。そしてその龍渓の内面を指摘し得た鷗外も、実は同じ表現意識を持っていたのではないか。龍渓を論じた鷗外の言葉は、そのまま自らを語ったものだと考えることもできよう。その意味に於いても龍渓の抱えていた問題は、鷗外に受け継がれて行かざるを得ない。

注

①「纂訳と文体――『小説神髄』研究(六)――」北海道大学文学部紀要（平成四年三月）

②以下の引用文も全て明治四十年文盛堂書店刊行の「経国美談」による。

③それはある意味で「花柳春話」に於ける「才子」「佳人」的規範化とも共通するものである。後に坪内逍遙が「小説神髄」下巻の「主人公の設置」の中で、

　近きころ矢野文雄大人の纂訳せられし『経国美談』といへる書は、智と徳性と情緒とを三俊傑に擬したるなり、と或博識が評されたり。此事はたして然らむには、あまり面白きことゝは思はず。何となれば、かのエパミノンダス、ペロピダスの輩は現に正史中の人間にて、仮設の人物にあらざればなり。

と批判したことも、正史に拠る事ができない場面の評価としては妥当性を持つものであったと思われる。

④『日本近代文学の出発』（紀伊国屋新書一九七三年発行）第二章政治小説六六頁。次の引用部分は六八頁。

⑤引用部は「明治文化全集」第十六巻外国文化篇に収録されている本文によった。

⑥これに付け加えて、「訳書読法」での小説評価にも触れたい。それは次の様なものである。（第七「身外ノ部類中、諸雑書ノ一」）

　又小説類ハ人ヲシテ苦楽ノ夢境ニ遊ハシメ人心ヲ慰ルノ功アリ。且ツ西洋ノ諸小説ヲ読ムトキハ其ノ人情風俗ノ微細ヲ知ルノ便益アリ。今正史ト小説トノ区別ヲ云ハヽ、正史ハ表面ノ事実ヲ記シ、小説ハ裏面ノ事実ヲ記ス。故ニ社会ノ有様ヲ表裏与ニ知ラント欲スレハ、小説モ亦タ益ナシト云フヘカラサルナリ。

　これは明らかに正史を軸としての評価であるが、文化的背景を知る上での有効性の指摘が注目される。龍溪にとっては、「人情風俗ノ微細ヲ知ル」ことが重要であった。「経国美談」の凡例に於ける、距離や地理、時刻に対する配慮が実に緻密であったことも、これで納得できる。

⑦「明治文学全集第十五巻　矢野龍溪集」による。

⑧『『浮城物語』とその周囲」右に挙げた巻に所収。初出は昭和三十七年。

⑨この文章は六月二十八日より七月一日まで四回は『郵便報知新聞』に、また同じ六月二十八日より七月二日まで『国民新聞』に発表された。本文は、明治文学全集所載のものを用いた。

⑩明治文学全集「解題」

⑪二十三年四月の出版の際に掲げられたもの。明治文学全集による。

⑫「国民之友」明治二十三年四月三日。引用文は右全集による。（次の内田魯庵の文も同じ）

⑬蘇峰の文章と同様巻頭に掲げられたもので、のち「しがらみ草紙」第七号に再掲されて『月草』に収録された。引用は鷗外全集第二十二巻（三十八巻本）による。